

アブヌワスは王、ハルン・ラシッドのところへよく行っていました。ある日、彼は困ったことがあります。「王に頼んで助けてもらおう。」と言いました。さて、王の家の門のところに着いた時、門のところにいた門番がアブヌワスに言いました。「アブヌワス、お前が援助をお願いしに行くのはわかっている。」アブヌワスは門番に言いました。「そうです。援助をお願いしに行くんです。」門番は言いました。「それでは、私とお前で半部ずつに分けるということに同意しなければ、お前を通すわけにはいかない。」アブヌワスは言いました。「わかりました。じゃあ、お互いに書面を書きましょう。」門番は言いました。「紙を持ってこい。」彼らは、お互いに文章を書きました。「ここに同意します。私はここを通ります。しかし、私が上に行ってそこでお願いするものは私と彼とで半分ずつに分けます。」門番は言いました。「よかろう。」アブヌワスは門番が書いたものを受け取り、自分が書いたものは門番に渡しました。そして王のところへ行きました。王が着いて言いました。「アブヌワス、どうした？」アブヌワスは言いました。「王、助けていただきたいことがあってお願いに来ました。」「どんな助けた。」アブヌワスは言いました。「私を鞭で 100 発打ってほしいのです。」「お前を 100 発鞭打ちにするのか？」アブヌワスは言いました。「はい。あなたの兵に私を 100 発鞭打ちにするように命じてください。」「いったいなぜだ。」アブヌワスは王に言いました。「いいのです。今日はそれが欲しいのです。アブヌワスが立ち上がると兵が叩き始め、50 になるまで数えました。アブヌワスは兵に言いました。「それまで、ストップ。」兵は言いました。「ストップ？なんでだ。」アブヌワスは言いました。「はい。下にいるあの門番ですが私は彼とこの書面をもって同意しました。私がここへきてお願いするものは二人で分け与えるというものです。なので、残りの 50 発は彼の分です。」「やつを鞭打ちにするのだ。」王はその門番が不実を行ったのだと知ったのでした。そしてもし彼が鞭打ちを拒むようであれば、王に何が起こったのかを説明することになるだろうとわかったのでした。というわけで、門番は鞭打ちをより多く受け、アブヌワスは本来望んでいたとおりお金を援助してもらったのでした。